

学位記番号： 修士第50号

氏名（本籍）： 中野育子（京都府）

学位の種類： 修士（看護学）

学位授与年月日： 平成16年3月25日

学位論文題目： 入院に至った切迫早産妊婦の自覚症状の特徴

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	51	(ふりがな) 氏 名	なか の いく こ 中 野 育 子
修士論文題目	入院に至った切迫早産妊婦の自覚症状の特徴		
<p><目的> 切迫早産妊婦の自覚症状の特徴を明らかにすることである。</p> <p><方法> 対象者は、妊娠 36 週未満の単胎妊娠で産科合併症がなく切迫早産で入院管理となった妊婦 39 名と、外来通院中の妊婦 87 名であった。データ収集方法は、質問紙調査法を用いた。データの分析は、入院時の医学診断の自覚症状、初経産別、分娩転帰別にて分類し、入院時の医学診断の自覚症状、経腔超音波断層装置による子宮頸管長の診断、外測陣痛計測所見、分娩転帰、質問紙の自覚症状との回答状況を分析した。</p> <p>切迫早産妊婦と正常妊婦の比較は、妊娠週数と年齢のマッチングコントロールにて対象を抽出した。抽出した対象は、切迫群 24 名と正常群 48 名にて分析を行った。</p> <p>分析においては、Fisher の直接法、Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定、一元配置の分散分析を用いた。</p> <p><結果></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 医学診断の腹部緊満感自覚の有無と自覚症状を比較すると、「お腹が張った」、「生理痛のような痛みがあった」の 2 項目に統計学的有意差を認めた。 2. 分娩転帰別と破水の有無では、早産群の破水が有意に高値を示し有意差を認めた。 3. 切迫群と正常群で自覚症状を比較すると、「お腹に何か突き刺さる感じがあった」、「お腹がしめつけられていた」、「お腹が張った」、「お腹に鈍い痛みがあった」、「おりものが増えた」、「お腹が硬かった」、「お腹がうずいた」、「痛みを伴う胎動があった」、「出血があった」、「お腹の中が何かに掴まれている感じがあった」、「お腹に鋭い痛みがあった」、「胃が痛かった」の 12 項目に統計学的有意差を認めた。 4. 「痛みを伴う胎動があった」は、正常群 54.2%が当てはまらないと回答したのに対し、切迫群 66.7%が当てはまると回答していた。 <p><考察></p> <p>早産群は、子宮頸管長所見に短縮傾向があった。子宮頸管長の短縮は早産を予測する可能性を示唆するという先行研究を裏付ける同様の結果であった。</p> <p>子宮収縮を示す「お腹が張った」は、切迫早産妊婦のみならず正常に経過する妊婦の多くも自覚していた。切迫早産妊婦の子宮収縮を示す自覚症状は、「お腹が張った」、「お腹に鈍い痛みがあった」、「お腹が硬かった」、「お腹に何か突き刺さる感じがあった」、「お腹が締めつけられていた」、等様々な表現があるため、看護にとっては、妊婦の自覚した症状を妊婦の感じたままを聞くことが重要である。</p> <p>胎動に関連したものあるいは胎動に類似する痛みは、切迫早産妊婦の自覚症状の特徴である。看護では従来、胎動についてはその有無に着眼した指導であったが、今後の看護において、胎動の状況もあわせて観察する必要があることが示唆された。</p> <p><総括></p> <p>入院に至った切迫早産妊婦の自覚症状の特徴を明らかにすることにより、看護者にとっては、妊婦の感じた具体的な自覚症状を認識することの基礎的な資料になる。</p> <p>本研究により、看護者の示す用語が少ないことで、妊婦との認識のずれが生じている。そのため、不確かな症状に対する妊婦自身の語りを帰納的な方法で明らかにし、看護者が示す表現がより妊婦に近い表現となることが今後の課題である。</p>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。